

人の気持ちに寄り添える子に……。

緊急事態宣言下のオリンピックが終わりました。開催の賛否、感染拡大の更なる懸念などいろいろなことが世論を騒がせました。これまでになく感染者は増え続けています…。

大概の日本人は、いざオリンピックが始まったらやはりテレビの前で、応援しましたよね。選手のひたむきに戦う姿、流れる汗。1点を争うハラハラドキドキするプレー。あたかも自分も一緒に戦っているようなそんな緊張感。うれし涙、悔し涙。見ている私達もまた、思わず涙がこぼれてきます。

このような感情は一体、何なのでしょう？それは、大人ならだれでも知っている「共感」という感情。これは、0歳から6歳までにその礎となるものが備わるのだそうです。相手に寄り添い共感できる気持ち「共感力」は、これから生き抜いていく子ども達にとってとても大きなウエイトを占めると言われています。しかし現代の育児環境は、核家族化や地域とのつながりの希薄化など生活スタイルの多様化とともに変化してきました。家族や地域とのつながりの中で、生きるために必要な力(非認知能力)を身につけていた機会が、減っている問題があります。

人とかかわる力人や気持ちに寄り添える力は、様々な人とのつながりの中で育まれていきます。私達社協3園は、教育保育を見直し、子ども達が主体的に物や人に関わる環境を整えてきました。一人遊びを十分に経験した子ども達は、一つ一つ成長するごとに、友達や身近な大人と関わっていきます。そこには、失敗や成功、けんかなどのトラブルも発生します。自分の経験や遊びの中で、相手の気持ちは自分と違うことや様々な感情があることそして、譲ったり譲られたりして自分の気持ちに、折り合いをつけることも学んでいきます。0歳から6歳まで過ごすこども園の中で、繰り広げられる子ども主体の遊びを通して、自分とは違う他人を尊重できる、寄り添える力を、培って欲しいと願っています。

お盆がきますね…。

日本人にとって、お盆は、お正月と同等の感慨深いものではないでしょうか？私が小さい頃は、「お盆は死んだ人が帰ってくる」とか「川や海に行ったらいけない」、「トンボは背中に死んだ人をのせている」など、かなりおどろおどろしいイメージがありました。それでもお墓に、亡くなった祖父を迎えに行ったり、提灯を下げた座敷でそうめんを食べるなど、いつもと違う非日常の家庭の行事を楽しんだ思い出があります。

各家庭、いろいろな過ごし方があると思います。お盆は、お墓参りをしたり、仏壇などに線香やお供え物をあげるなどの経験をさせて欲しいと思います。お墓に眠っている人は誰なのか、その人は自分にとってはどういう人なのか…。4.5歳ぐらいになると理解できると思います。お父さんとお母さんがいて、そのまた上にお祖父ちゃんとお祖母ちゃんがいる。そのまた上には、ひいお祖父ちゃんとひいお祖母ちゃんがいる。幼いながらも、自分の命は、ふっと湧いたものではなく**代々続く命の継承の中に存在すること**に気づくはず。自分**は、1人ではなく大切な存在なんだと意識できることは、自分を肯定し自尊感情をあげることに**つながっていきます。

この時期は、広島と長崎の原爆投下祈念日や終戦記念日などしめやかな報道がなされます。たくさんの亡くなった命の上に、私達が生かされていることを思うと命の不思議さや大切さに気づかされます。また、コロナウイルスの感染が拡大する中、毎日のように失われる命もあります。何百万の亡くなった命から、ウイルスや病気の解明、ワクチンや治療薬の開発がなされています。私達が生きていること、生かされている意義を子ども達に伝えていくことが、私達大人の使命なのでは…とまた、今年もお盆を前に考えています。